

教会とは何でしょうか？ 教会を考える時にそこで誰と出会い、話をしたり、つながりを持ったかということとは大きな影響を与えていると思います。以前いた教会に「先生、私はイエス様がいればそれで十分ですから、教会は良いです。教会の人間関係はいろいろと煩わしいのもう結構です。」という人がいました。その人の気持ちは良く分かります。何故なら私自身も長い間そのような思いでしたから。それは牧師になって立場が変わったから考え方も変わったというわけではありません。しかしある時にふと思いました。パウロが諸教会に出した手紙が 13 通新約聖書にあります。しかし、殆どの手紙の中でその教会が持っている弱い部分、問題点、罪深い部分が指摘されています。それこそ、今の教会の方がまだまだと思えるようなことも多々あります。パウロはそれを書きながらどんな気持ちだったんだろうかと推測したのです。確かに現実にはパウロが指摘する通りであったでしょう。しかしパウロは教会の人たちをただ単純に批判して切り捨ててはいないのです。どんなことがあろうとそこには教会は神が建てたものであり、どんな状態にあろうとそこにキリストが十字架で私たちの罪を贖って、この地上に置いてくださったものという神の愛を見ていました。パウロが教会は自分が建てているものという意識でいたら、教会のすべてに腹が立って、イライラしていたことでしょう。しかし、パウロは教会に流れている神の愛と真実を知ったからこそ、そしてそこにいる兄弟はキリストが十字架の死をもって滅びから贖われた、買い戻された人々であることが分かったからこそ、涙をもって書いたと思います。今日のエペソ書にはまさに教会の本質が記されています。

エペソ人への手紙の 1 章と 2 章に、教会とは、こういうものであるという定義が、三つ記されています。第一は、1:23 に「教会はキリストのからだであり・・・」とあるように、教会は「キリストのからだ」です。キリストが「かしら」であり、キリストを信じる者たちはその「手足」です。教会に属するのは、キリストのからだの器官としてキリストに属しているのです。第二は、2:19 にあるように教会は「神の家族」です。神が父であり、私たちは神の子ども、神の家族の一員です。そして第三が、今日の箇所にあるように、「聖なる宮」「御霊による神の御住まい」です。教会が「建物」にたとえられています。けれども、建物は建物でも、それは劇場や学校ではありません。それは神殿です。神を礼拝する場所です。国や地域で劇場のような設備をもち、音楽が盛んな教会があります。設備が整っていることは良いことなのですが、教会はどんなに立派であっても劇場ではありません。劇場では、観客が、ステージの上で歌ったり、しゃべったりする人を観るだけです。教会では、教会に来る人が観客になることは神の御心ではありません。礼拝に来る者はみな、ともに賛美を歌い、祈りをささげ、神のことばに応答することによって、礼拝をささげるために来るのです。観客ではなく、礼拝者になるのです。こういう言い方が出来るでしょう。教会では「神」が私たちの礼拝の観客である。最も重要なことは観客の心の中で起こるのであって、舞台上の役者の間で起こるのではない。ですから「この礼拝から私は何を得たのだろうか。学んだのだろうか？」と自問するよりも「神はこの礼拝に出ている私のことをどのように見ておられるのだろうか」と自問しながら会堂を出てゆくべきではないでしょうか。W.ウインクは「礼拝とはその家の主人が誰であるのかを思い出すこと」と言いました。神はどんな人に来て欲しいのでしょうか？ 詩篇 68 篇 6 節に「神は孤独な者を家に住まわせ・・・」とあります。これは他人のことではなく自分自身の心に必要を覚えている人こそ、神はその世話をしたく願っておられるということです。イエス様も「医者が必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です。わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招くために来たのです。」マルコ 2:17 とおっしゃいました。

また、教会を劇場でなかったら学校のようなものと考える人も多くいると思います。確かに昔も今も教会と教育とは切っても切れない深いつながりがあります。しかし、教会は学校以上のものです。教会は「教える会」と書きますので、教会を学校のように考えてしまいがちですが、もともと英語の "Church"

という言葉には、「主の家」という意味があります。21 節に「主にある聖なる宮となる」とあり、22 節に「御霊によって神の御住まいとなる」とあるように、教会は、そこに神が住まわれる神殿なのです。

では、教会が「主の家」であるということは、私たちにとってどういう意味があるのでしょうか。そして教会は「主の家」としてどうあるべきなのでしょう。

第一に、教会には「きよさ」が求められます。「聖霊の宮」という言葉がはじめて出てくるのはコリント人への手紙第一 3 章ですが、当時のコリントの教会には、さまざまな問題がありました。そのひとつは教会の不一致でした。コリントのクリスチャンは、「わたしはパウロにつく。」「私はアポロに。」「私はペテロに。」と言って、お互いに分かれていたのです。それに対して使徒パウロは、「あなたがたは神の神殿であり、神の御霊があなたがたに宿っておられることを知らないのですか。もし、だれかが神の神殿をこわすなら、神がその人を滅ぼされます。神の神殿は聖なるものだからです。あなたがたがその神殿です。」コリント第一 3:16-17 と教えました。教会は神の神殿であり、聖なるものです。ですから、教会の一致を壊すものは、聖なる神殿を破壊することになるのです。

コリント第一 6:19 には私たちは聖霊の宮であると書かれています。コリントの町は栄えていましたが同時にコリントのクリスチャンは多くの誘惑にとりかこまれていました。それで、聖書は「あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。」と、きよい神の宮を罪で汚してはならないと教えています。

旧会堂時代に消火器を 2 度も教会に投げ入れられて被害を受けたことがありました。新会堂でも国道側の入り口付近は 2 度も車が突っ込んできて建物が傷つけられたことがあります。そのようなことはだれもがひどいことだと眉をひそめます。しかし、教会に人間的なものの考え方が入って来て、信仰の一致が壊されてしまったり、様々な罪が入って来て教会のきよさが崩されてしまう、金銭や社会的地位、名誉や人間的な賞賛などというものが「偶像」となってあがめられるということは大きなダメージを教会に与えてしまうことがあります。世の中では「強いこと」「大きいこと」「豊かなこと」が求められ、「きよいこと」などは、かえって邪魔なものと思われていますが、神が教会に求めておられる第一のことは「きよいこと」です。教会が「きよさ」を失うなら、他のすべての良いものも失ってしまうのです。私たちは「聖霊の宮」として「きよさ」を求め続けたいと思います。

第二に、教会には「あたたかさ」が求められています。「きよいこと」と「あたたかい」ことは一見矛盾するようですが、そうではありません。というのは、神の「きよさ」は、罪ある私たちを切り捨てるような冷たいものではないからです。旧約の時代、神殿は、きよく、厳かな場所でしたが、そこは同時に、神から罪を赦された人々が、そこで神との和解の食事をして、罪の赦しを喜ぶ場所でした。「主の家」というのは、神を父とする家族のまじわりの場です。それは、愛に満ちた父なる神の家なのですから、そこが冷たい場所であるはずがありません。神を愛する者たちはみな、主の家を愛します。主の家での神とのまじわり、神を父として互いを兄弟姉妹とする神の家族のまじわりを求めます。詩篇には、そのようなことが数限りなく出てきます。たとえば、「まことに、私のいのちの日の限り、いつくしみと恵みとが、私を追って来るでしょう。私は、いつまでも、主の家に住まいましょう。」詩篇 23:6「私は一つのことを主に願った。私はそれを求めている。私のいのちの日の限り、主の家に住むことを。主の麗しさを仰ぎ見、その宮で、思いにふける、そのために。」詩篇 27:4「幸いなことよ。あなたが選び、近寄せられた人、あなたの大庭に住むその人は。私たちは、あなたの家、あなたの聖なる宮の良いもので満ち足りるでしょう。」詩篇 65:4「まことに、あなたの大庭にいる一日は千日にまさります。私は悪の天幕に住むよりはむしろ神の宮の門口に立ちたいのです。」詩篇 84:10 などです。私たちのこころがこのような願いで満たされる時、また、教会を主の家として愛し、慕う時、そこに本物のあたたかさがおのずと生み出されてくるのです。

第三に、教会には「成長」が求められています。教会は、主の家です。聖霊の宮です。しかし、それは完成した建物ではなく、なお、建設中の建物です。主イエスが、「あなたこそ生ける神の御子キリストです。」と告白したペテロに、「わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てます。」(マタイ 16:16,18)と云われてから、もう二千年もたっていますが、教会はなお建設途上にあります。それは建設中ですから、当然そこには、ちらかっているところもあるでしょう。何かに躓いたり、何かにぶつかったりするかもしれませんが。しかし、私たちは、それで失望したり、落胆したりせず、完成された教会を望み見て、教会が主の家、神殿として築きあげられるために自分をささげていきます。ペテロ第一 2:5 に「あなたがたも生ける石として、霊の家に築きあげられなさい。」とあります。これは「こんな教会だと思わなかった」「この教会は・・・」と評価する立場から、私たちひとりびとりが、「霊の家」である教会の生ける材料として築きあげられることが奨められています。もちろん、それが蛍池聖書教会であるなら大変感謝ですが、そうでなくとも神様は私たちが教会の生ける材料として築きあげられるように奨めておられます。

最後に教会を建てていくという場合、大切なことは、基準となる石にそって建てあげられていくということです。エペソ 2:20 に「あなたがたは使徒と預言者という土台の上に建てられており、キリスト・イエスご自身がその礎石です。」とあるように、「礎石」であるキリストから離れては、神の宮を建てることはできません。昔は建物を建てる時にはまず、基準となる石を数箇所に置きました。「礎石」とは、そうした基準となる石をさしています。それから基準となる石と石の間を他の石で埋めていくのです。また、埋め合わせるために持ってきた石がそこに入らない時は、その石を削りました。持ってきた石が入らないからといって基準となる石を動かしてしまったり、建物全体が狂ってしまうからです。霊の家である教会を建てあげる時も、礎石である聖書の基準からはみだしてしまったり、それを無視したり、新しい基準を勝手につくって、間違ったことを教会の中に取り入れてしまうということがあるとゆくゆくは崩れてしまいます。教会を建てあげていくために必要なもうひとつのことがエペソ 2:21 にあります。「この方にあつて、組み合わされた建物の全体が成長し、主にある聖なる宮となる」と書かれています。建物は、材料と材料とが組み合わさって建てあげられていきます。石造りの建物では、お互いを釘でとめたり、接着剤で張り合わせたりはしません。材料になる石を削り、互いに噛みあうように、組み合わせようにするのです。日本のお城がそうですよね。教会の成長の秘訣は、じつにこの「組み合わせ」にあるのです。多くの人は「誰か、ぬきんでた能力を持った人がいれば、有力な人がいれば、教会は成長するのだが…」と考えます。しかし、教会は、たとえ人間的には力の乏しい者たちであっても、ひとりびとりがキリストにあつてしっかりと組みあわせられることによって成長するのです。今、ラグビーのワールドカップで盛り上がっていますが先日、ニュージーランドのチーム、オールブラックスの特集をテレビでやっていました。その中で何よりも一番大切なことはコミュニケーションだと言っていました。一つの場面を例にあげていました。左側のボールのあるところに敵味方入り乱れて団子状態のようになっています。キャプテンは真ん中後方からそれを見て、瞬時に逆の右側に向きを変えると、右側にいた選手たちもすぐに右側に動き出そうとしたのです。やがてボールは右方向に出されて行きました。驚いたのは右側にいた選手たち(つまりボールのあるところにはいない選手)はキャプテンのしようとしていることを悟って自分のなすべきことを全力でやったことです。ボールがあるところに目が行きがちですがボールの無いところでこんなに先を読んだ準備がなされていたことは驚きでした。しかもそれは一瞬にして伝わっているのです。そのキャプテンこそ主イエス・キリストだと思いました。聖書に繰り返し出てくる「キリストにあつて」という言葉がそのことを示しています。お互いが、まず、しっかりとキリストにつながっているとキリストの心が分かります。すると自分の役目、自分のなすべきことが見えてくるのです。

一緒にキリストにあつて教会を建て上げる働きへと進んでゆきたいと思います。